

## ランチョンセミナー 2

### 胃酸分泌と胃十二指腸運動 ―今昔―

川崎医科大学 消化管内科学 教授

春間 賢

以前は、加齢とともに胃酸分泌が低下することが生理的現象と考えられていたが、ヘリコバクター・ピロリ（以下ピロリ）の登場とともにその考え方は大きく変わった。すなわち、ピロリ感染陽性者では、加齢とともに萎縮性胃炎が進展し、その結果、胃酸分泌が低下する。一方、ピロリ感染陰性者では萎縮性胃炎は起こらず、従って、胃酸分泌は低下しない。これまで加齢現象と考えられていたのは、ピロリによる炎症の結果であることが明らかになった。さらに、胃酸分泌は食事を中心とした環境因子の影響を受け、その結果、胃酸分泌は大きく変化することも分かってきた。

以前は、胃もたれや胃部不快感があると、萎縮性胃炎のため胃内食物の消化が十分に行われておらず、また、胃酸分泌が低下するために胃運動機能の低下が起こり、症状が発現すると考えられていた。しかしながら、最近の多くの報告は、上部消化器症状の発現には胃酸そのものが関わっていることを指摘しており、正酸あるいは高酸ゆえに症状が発現す可能性があり、以前の無酸＝胃もたれという考え方とは大きく変わってきている。

本セミナーでは、上部消化器症状の発現機序を中心に、胃酸分泌と胃十二指腸運動を取り上げ、その変遷について講演する。